

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第20集

阪南丘陵開発計画事業に伴う

井山城跡

—— 発掘調査報告書 ——

1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第20集

阪南丘陵開発計画事業に伴う

井山城跡

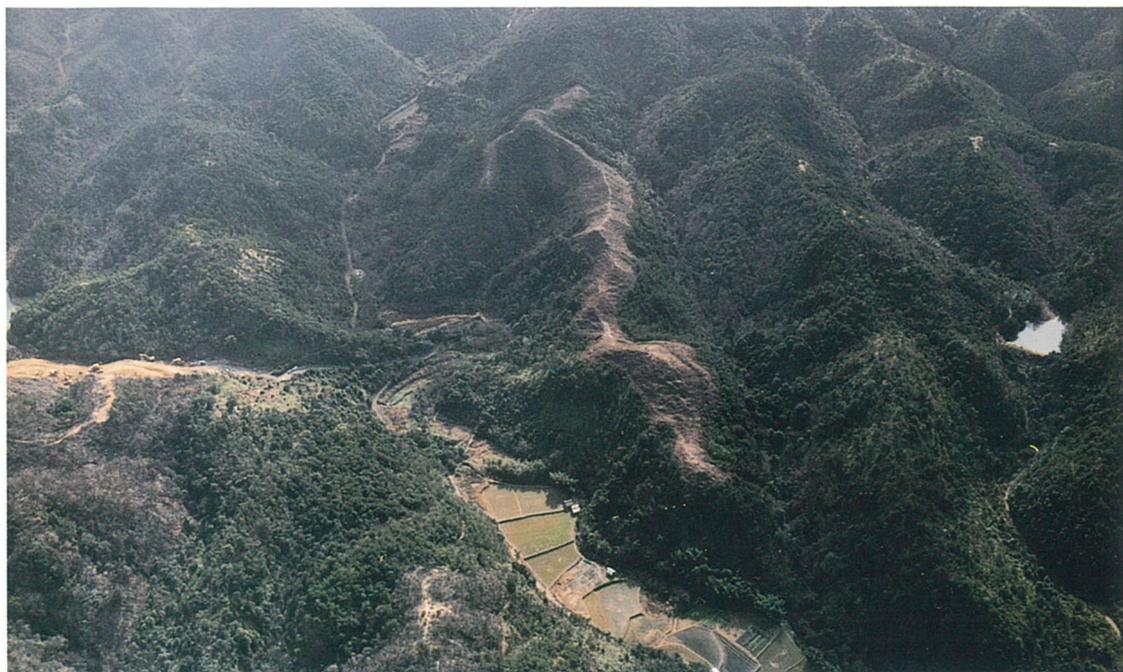
—— 発掘調査報告書 ——

1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



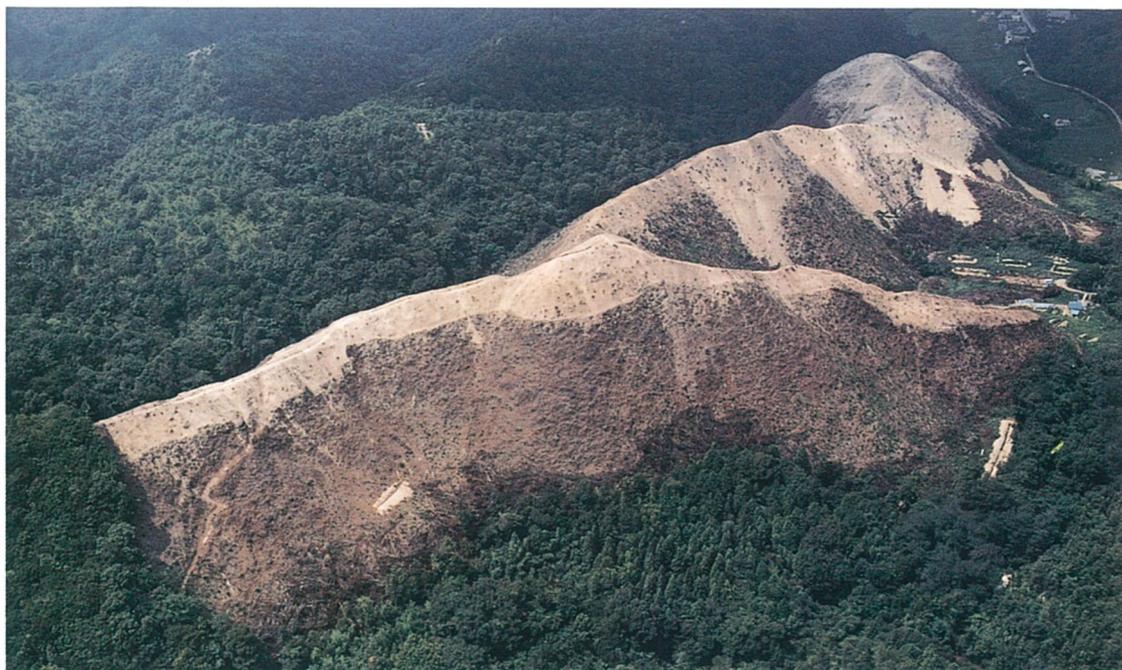
井山城跡 遠景（東から）



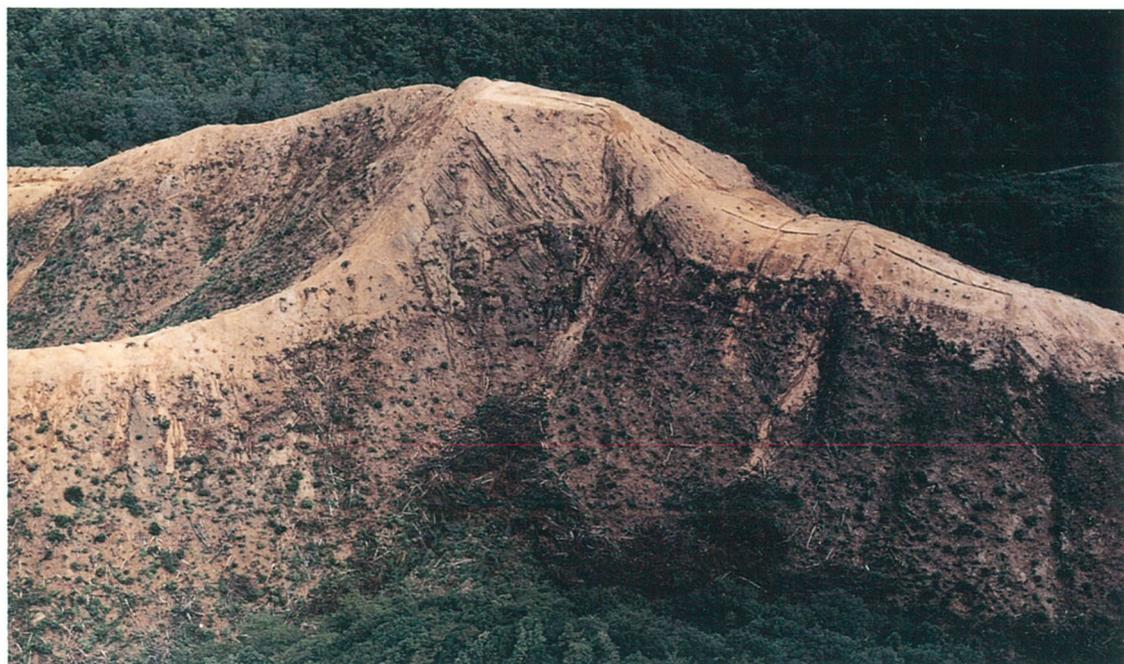
井山城跡 遠景（北から）



井山城跡 遠景（東から）



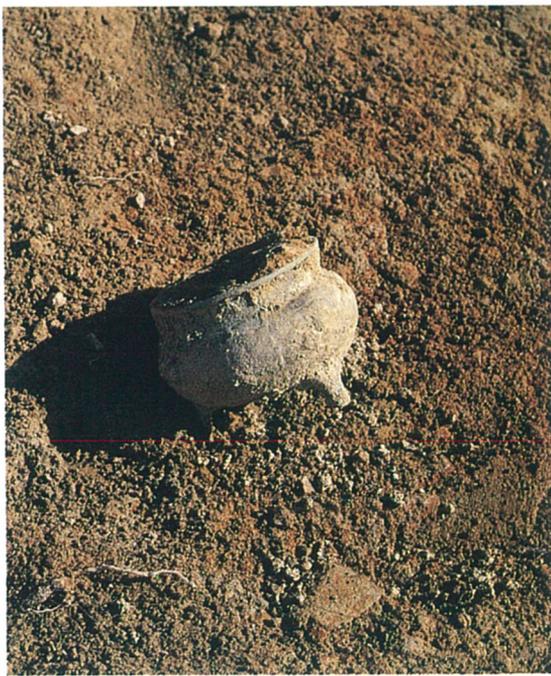
井山城跡 全景（南から）



井山城跡 曲輪4（東から）



飯ノ峯畑遺跡 屋敷跡



飯ノ峯畑遺跡 遺物出土状況

序 文

阪南丘陵開発計画事業は、関西国際空港建設に伴い大阪府南部で計画された土砂採取予定地ならびに土砂採取後の跡地利用として空港業務関係の従業員用住宅としての利用を計画された事業地であります。

本事業地は、大阪府南部の阪南町に位置し、大阪湾岸より約2 km程中に入った標高約100～180m程度の丘陵地で、砂岩・泥岩等で構成されています。

当該地については、開発計画が立案されるまで文化財については、あまりよく知られなく、周辺に塚谷古墳群等が存在することが確認されていただけであります。このような状態であるので開発計画が具体化されてから文化財調査を実施することとなり、本協会が計画地全域について文化財の分布調査・試掘調査を大阪府企業局からの委託を受けて昭和60年・61年に実施しました。その調査結果、遺構・遺物等の検出が確認された遺跡について、発掘調査を行うことになりました。

今回報告する井山城跡は、分布調査では、あまり明確に遺構を把握することができず地形が自然でなく人工の手が加わったと見られる地域を樹木の伐採と試掘調査を重点的に行った所、曲輪跡・堀切り跡等の遺構が検出されたので本格的な調査を実施いたしました。調査の結果中世の山城跡であることが判明するなど多くの成果を得ることができました。

本発掘調査を実施するにあたり、大阪府教育委員会、大阪府企業局、阪南町、阪南町教育委員会、その他地元関係者の皆様に多大なるご協力、ご支援を賜り、深く感謝いたします。また、今後の当協会の調査等にご指導を賜りますようお願い申し上げます。

昭和 63 年 3 月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理 事 長 浅 野 素 雄

例 言

1. 本書は大阪府泉南郡^{はこつくり}箱作に所在する井山城跡・^{いやまじょうあと}飯ノ峯神社・^{いいのみね}飯ノ峯畑遺跡^{いいのみねばた}の発掘調査報告書である。
2. 調査は、関西国際空港建設に伴う阪南丘陵開発事業の事前調査として、大阪府(企業局内陸整備課)の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、(財)大阪府埋蔵文化財協会が実施したものである。
3. 昭和62年2月14日から3月31日迄試掘調査を行い、本調査は5月21日に開始し、11月14日終了した。引き続き整理作業を進め昭和63年3月31日完了した。
4. 井山城跡本調査は、調査区を北からA B C Dに4分割した。それぞれの担当者はA地区一瀬宜田佳男、B地区一宮野淳一・西村歩、C地区一小澤毅・佐々木好直、D地区一服部美都里、全体調整一岩崎二郎である。執筆分担は文末に記す。
5. 遺構番号は、(財)大阪府埋蔵文化協会の定める遺構区分に従った。
6. 遺構図に表示した方位、座標値は、昭和43年建設省告示第3059号第VI座標系による。
7. 地層の色調は『新版標準土色帳』第5版、遺物の色調は『実用 Today's COLOR/300 JISによる現代実色見本帖』による。
8. 遺構写真は各地区の担当者が撮影し、現像焼付は当協会資料係、小倉勝、井藤暁子が行った。
9. 本書の作成にあたり、次の方々の協力を得た。記して感謝する。
岡崎愛司氏(菅原神社宮司)、北垣聰一郎氏(檀原考古学研究所)、西山要一氏(奈良大学)、藤井重夫氏(日本古城友の会)、前田二次郎氏(日本古城友の会)、三好義一氏(阪南町教育委員会)、村田修三氏(奈良女子大学)、山上雅弘氏(兵庫県教育委員会)(五十音順) その他、飯ノ峯畑村地元の方々。
10. 本書の編集は、宮野、服部が行った。

目 次

第1章 調査の経過	1 頁
第2章 立地と環境	
第1節 地理的環境	4 頁
第2節 歴史的環境	6 頁
第3章 調査の成果	
第1節 調査成果の概要	
A 調査成果の概略	15 頁
B 試掘調査結果	16 頁
C 谷部調査結果	18 頁
第2節 井山城跡	26 頁
第3節 飯ノ峯神社、石祠	
A 飯ノ峯神社	43 頁
B 飯ノ峯神社下層遺構	50 頁
C 石祠	54 頁
第4節 飯ノ峯畑遺跡	57 頁
第4章 まとめ	63 頁

挿図目次

第1図	地区割図	3頁
第2図	阪南町位置図	4頁
第3図	阪南町地質図	5頁
第4図	泉州地方の旧石器時代遺跡分布図	6頁
第5図	泉州地方の縄文時代遺跡分布図	7頁
第6図	泉州地方の弥生時代遺跡分布図	8頁
第7図	泉州地方の古墳時代遺跡分布図	9頁
第8図	『和泉名所図絵』	12頁
第9図	『摂津名所図絵』	12頁
第10図	阪南町内遺跡分布図	13～14頁
第11図	井山城跡試掘トレンチ配置図	17頁
第12図	スガマ地区土層柱状図	18頁
第13図	スガマ地区中世遺構概略図	19頁
第14図	スガマ地区出土遺物(一)	20頁
第15図	スガマ地区近世遺構概略図	21頁
第16図	スガマ地区出土遺物(二)	21頁
第17図	的場地区トレンチ配置図及び土層断面図	24頁
第18図	的場地区出土遺物	25頁
第19図	井山城跡遺構配置図	27～28頁
第20図	曲輪1 (215-O X) 断面図	29頁
第21図	曲輪2 (227-O X) 平断面図	29頁
第22図	曲輪3 (226-O X) 平断面図	30頁
第23図	曲輪4 (255-O X) 遺構配置図	31～32頁
第24図	礎石建物1 (250-O B) 平・断面図	33頁
第25図	礎石建物1 (250-O B) 出土遺物	34頁
第26図	礎石建物2 (251-O B) 平・断面図	35頁
第27図	石組み1 (252-O X) 平・断面図	36頁

第28図	石組み 2 (253-O X) 平・断面図	35頁
第29図	曲輪 4 出土遺物(一)	36頁
第30図	曲輪 4 出土遺物(二)	36頁
第31図	土壌 1 (235-O O) 平・断面図	37頁
第32図	土壌 2 (236-O O) 平・断面図	37頁
第33図	土壌 3 (233-O O) 平・断面図	37頁
第34図	土壌 4 (234-O O) 平・断面図	37頁
第36図	土壌 5、6、7 (230-O O、231-O O、232-O O)	39頁
第36図	土壌 5、6、7 (230-O O、231-O O、232-O O)	39頁
第37図	土壌 9 (223-O X) 平、断面図	39頁
第38図	土壌10 (219-O X) 平、断面図	39頁
第39図	土壌11 (217-O O) 平、断面図	40頁
第40図	土壌12 (222-O X) 平、断面図	41頁
第41図	土壌13 (218-O X) 平、断面図	41頁
第42図	土壌14 (228-O X) 平、断面図	41頁
第43図	土壌15 (229-O X) 平、断面図	42頁
第44図	飯ノ峯神社平面図	43頁
第45図	木造社殿正面図、側面図	44頁
第46図	石祠正面図、側面図	46頁
第47図	丑神神体実測図	47頁
第48図	棟札実測図	47頁
第49図	飯ノ峯神社及び文字瓦線刻印判拓影平・断面図	48頁
第50図	飯ノ峯神社平、断面図	50頁
第51図	飯ノ峯神社下層遺構出土遺物	51頁
第52図	阪南町内、社寺分布図	52頁
第53図	石祠、石組み	54頁
第54図	石祠、実測図	55頁
第55図	石祠出土遺物	56頁
第56図	箱作村絵図	57頁
第57図	飯ノ峯畑遺跡遺構配置図	59頁

第58図	屋敷跡平面図	60頁
第59図	波太神社 石燈籠	64頁
第60図	加茂神社 石造鳥居	64頁
第61図	箱作共同墓地 六体地藏仏	64頁
第62図	泉州地方の地形による中近世城郭分布図	65頁

表 目 次

第1表	木造社殿覆屋屋根瓦構成表	51頁
第2表	阪南町内社寺消長	55頁
第3表	飯ノ峯畑村消長	64頁

図 版 目 次

図版1	井山城跡周辺航空写真（一）昭和22年撮影	
図版2	井山城跡周辺航空写真（二）昭和36年撮影	
図版3	井山城跡周辺航空写真（三）昭和43年撮影	
図版4	井山城跡周辺航空写真（四）昭和60年撮影	
図版5	井山城跡現況	a. 伐開前現況（A地区から） b. 伐開前現況（D地区から）
図版6	試掘調査（一）	a. 伐開後現況B地区、曲輪1 b. 伐開後現況C・D地区頂部3、曲輪4
図版7	試掘調査（二）	a. 伐開後現況D地区道状遺構 b. 伐開後現況D地区道状遺構

- 図版8 試掘調査(三) a. 調査区全景(西上空から)
b. 調査区全景(北上空から)
- 図版9 試掘調査(四) a. 第2～6トレンチ
b. 第9トレンチ
- 図版10 試掘調査(五) a. 第9トレンチ 礎石検出状況
b. 第11トレンチ 堀切検出状況
- 図版11 谷部調査(一) a. 調査区全景
b. 調査区全景 左スガマ地区、右の場地区
- 図版12 谷部調査(二) a. スガマ地区 第19トレンチ小溝群検出状況
b. スガマ地区 第14トレンチ断面
- 図版13 谷部調査(三) a. スガマ地区 第22トレンチ足跡検出状況
b. スガマ地区 第24トレンチ断面
- 図版14 谷部調査(四) a. 的場地区 第29トレンチ小溝群検出状況
b. 的場地区 第29トレンチ断面
- 図版15 谷部調査(五) a. 的場地区 第26トレンチ断面
b. 的場地区 第30トレンチ断面
- 図版16 井山城跡各部全景(一) a. A地区丘陵先端部(東から)
b. B地区頂部1(南から)
- 図版17 井山城跡各部全景(二) a. C地区頂部2(北から)
b. D地区 曲輪4、5(北から)
- 図版18 井山城跡遺構(一) a. B地区 曲輪1 215-O X(東から)
b. B地区 曲輪2 227-O X(東から)
- 図版19 井山城跡遺構(二) a. D地区 曲輪4 255-O X(西から)
b. D地区 礎石建物1 250-O B(東から)
- 図版20 井山城跡遺構(三) a. D地区 曲輪4 石組み2 253-O X(北から)
b. D地区 曲輪4 石組み1 252-O X(西から)
- 図版21 井山城跡遺構(四) a. D地区 曲輪4 石組み2 253-O X
b. D地区 曲輪4 石組み2 253-O X
- 図版22 井山城跡遺構(五) a. D地区 曲輪4 遺物出土状況
b. D地区 曲輪4 遺物出土状況

- 図版23 井山城跡遺構 (六) a. D地区 曲輪4 土壇 235-O O
b. D地区 曲輪4 土壇4 234-O O
- 図版24 井山城跡遺構 (七) a. D地区 堀切 254-O X断面 (東から)
b. D地区 堀切 254-O X (東から)
- 図版25 井山城跡遺構 (八) a. D地区 曲輪5 256-O X (北から)
b. D地区 土壇 230-O O、231-O O、232-O O
(東から)
- 図版26 井山城跡遺構 (九) a. B地区 土壇2 223-O O (東から)
b. B地区 土壇2 223-O O断面 (北西から)
- 図版27 井山城跡遺構 (十) a. B地区 土壇3、4 219-O O、217-O O (西から)
b. B地区 土壇5 222-O O (西から)
- 図版28 井山城跡遺構 (十一) a. B地区 土壇7 228-O X (北東から)
b. C地区 土壇 229-O X (南から)
- 図版29 飯ノ峯神社 (一) a. 全景 (北から)
b. 石祠 (東から)
- 図版30 飯ノ峯神社 (二) a. 丑神神体石 (北から)
b. 棟札、石燈籠
- 図版31 飯ノ峯神社 (三) a. 調査区全景 (北から)
b. 陶磁器出土状況
c. 銭出土状況
- 図版32 石祠 (一) a. 全景 (東から)
b. 石組み (西から)
- 図版33 石祠 (二) a. 石祠近景 (東から)
b. 石祠近景 (西から)
- 図版34 飯ノ峯畑遺跡 (一) a. 伐開後現況
b. 調査地区全景
- 図版35 飯ノ峯畑遺跡 (二) a. 飯ノ峯川左岸屋敷跡石垣9-O E
b. 飯ノ峯川左岸屋敷跡石垣13-O E
- 図版36 飯ノ峯畑遺跡 (三) a. 飯ノ峯川左岸屋敷跡石垣11-O E
b. 飯ノ峯川左岸石材加工場15-O X

- 図版37 飯ノ峯畑遺跡（四） a . 飯ノ峯川左岸道状遺構
b . 飯ノ峯川右岸道状遺構
- 図版38 飯ノ峯畑遺跡（五） a . 飯ノ峯川左岸石臼散布状況
b . 飯ノ峯川左岸石臼散布状況
- 図版39 飯ノ峯畑遺跡（六） a . 飯ノ峯川右岸屋敷跡全景
b . 飯ノ峯川右岸屋敷跡石垣30—O Z
- 図版40 飯ノ峯畑遺跡（七） a . 飯ノ峯川右岸屋敷跡検出井戸
b . 飯ノ峯川右岸屋敷跡検出排出施設
- 図版41 飯ノ峯畑遺跡（八） a . 飯ノ峯川右岸屋敷跡検出石列
b . 飯ノ峯川右岸銅製品出土状況
c . 飯ノ峯川右岸銅製香炉出土状況
d . 飯ノ峯川右岸鉄鎌出土状況
e . 飯ノ峯川右岸漆器椀出土状況
- 図版42 飯ノ峯畑遺跡（九） a . 飯ノ峯川右岸屋敷跡石製流し出土状況
b . 同上 陶磁器（蓋、徳利）出土状況
c . 〃 〃 （燭台） 〃
d . 〃 〃 （甕、搥鉢蓋） 〃
e . 〃 〃 （椀） 〃
- 図版43 飯ノ峯畑遺跡（十） a . 飯ノ峯川右岸屋敷跡石垣28—O E
b . 〃 〃 〃 （南から）
- 図版44 飯ノ峯畑遺跡（十一） a . 〃 〃 〃 29—O E
b . 〃 〃 〃 石組み遺構20—O E
- 図版45 井山城跡出土遺物（一） 曲輪4 出土遺物
- 図版46 井山城跡出土遺物（二） a . 曲輪4 出土遺物
- 図版47 井山城跡出土遺物（三） b . 曲輪4 内面
- 図版48 飯ノ峯神社遺物（一） 飯ノ峯神社瓦
- 図版49 飯ノ峯神社遺物（二） 飯ノ峯神社近世陶磁 その他
- 図版50 飯ノ峯神社遺物（三） 飯ノ峯神社棟札
- 図版51 石祠・スガマ地区出土遺物 a . 石祠出土遺物
b . スガマ地区出土遺物

図版52 スガマ地区出土遺物 a. 中世遺物

b. 近世遺物

図版53 飯ノ峯畑遺跡出土遺物 (一)

図版54 飯ノ峯畑遺跡出土遺物 (二)

図版55 飯ノ峯畑遺跡出土遺物 (三)

図版56 飯ノ峯畑遺跡出土遺物 (四)

図版57 飯ノ峯畑遺跡出土遺物 (五)

図版58 飯ノ峯畑遺跡出土遺物 (六)

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

井山城跡は日根・淡輪文書の記載や地元に残る伝承により飯ノ峯畑集落の南方の尾根上にその存在が比定されていた。その周辺一帯の丘陵が関西国際空港に伴う土砂採取地に選定されたため、当該地の文化財の取り扱いについて昭和60年7月大阪府教育委員会文化財保護課と大阪府企業局内陸整備課との間で協議が行なわれ、昭和60年10月から11月に（財）大阪府埋蔵文化財協会は大阪府教育委員会文化財保護課の指示にもとづき大阪府（企業局内陸整備課）の委託を受け土取り予定地の分布調査を実施した。その結果21箇所の遺跡が発見されたが、井山城に関しては尾根上に4箇所の平坦面や空堀状の窪みが観察され遺跡として周知されるに至った。

昭和62年にはそのうち9遺跡の試掘調査を実施した。井山城跡もその一環として昭和62年2月から3月に試掘調査を実施した。その結果、山頂の平坦面において礎石を検出し、その下の尾根では堀切を検出した。また、別のピークの周辺に人為的に造成したかと思える平坦面が伐採の結果発見された。そのためこの尾根全体の調査が必要と判断され、昭和62年6月から調査を開始した。一方、分布調査で第5'地点とされた飯ノ峯川をはさむ対岸の尾根は試掘調査の結果遺構・遺物を検出することができず、本調査は実施しなかった。

第2節 調査の経過

本調査は工事計画とのかねあいから短期間に済ませる必要があり、A～Dの四つの地区に分割して行なった。本調査を行なうに先立ち地表観察して調査が必要な範囲を決定すべく、昭和62年5月20日からまず尾根筋から谷にいたる斜面の伐採を行なった。その間C・D地区東麓の「的場」の地名が残る平坦地にトレンチを掘削し山城に係る遺構の有無を検討したが、中～近世の少量の遺物と数枚の耕土層を検出するにとどまり山城に係る遺構は存在しなかったため、以後尾根部を中心に調査を実施した。

A地区では伐採終了後の地形観察によると豎堀や曲輪の存在が考えられたが、調査の結果人為的な遺構は存在しないことが分かった。層序は岩盤の上に腐植土層（第1層）・黄色砂質土層（第2層）の2層だけが堆積しており、第1層からは極く少量の現代の遺物が出土し、第2層は無遺物層であった。この2層を5月20日から順次人力掘削し地山面の空中写真撮影を6月25日行ない、6月30日調査を終了した。

B地区は尾根部の伐開作業中に東麓の飯ノ峯神社社殿の実測と周辺の地形測量を行なった。人力掘削は6月13日から行なったが、基本的にA地区と同様の層序であり、第2層下部から地山面にかけて土壌・ピットや平坦面を検出した。土壌・ピットには焼土や炭片を含むものが多い。平坦面の一部には礎石を伴ったと考えられるものがあり、曲輪の可能性が考えられる。しかし、これらの遺構には遺物はほとんど無く確実に山城に伴うと断定するには至らなかった。7月30日に空中写真撮影を行ない調査を終了した。

C地区ではまず谷部分の試掘調査から開始した。谷部分では石祠の移転について調整中であったため石祠所在地を残して5月22日伐開を開始し、5月25日から試掘トレンチの掘削を始め、6月17日終了したが山城に伴う遺構は検出されなかった。6月16日から7月29日まで尾根部の調査を行ない、2基の焼土を含む土壌を検出したが、井山城存続期のものとする確証は得られなかった。尾根部の調査終了直前の7月25日に石祠移転問題が解決した。そこで急遽石祠付近の伐開と発掘調査を26日から実施し、7月30日調査を終了した。

D地区もC地区と同様まず谷部の試掘調査を5月21日から6月6日まで実施したがやはり山城関連遺構は検出されなかった。尾根部の調査は5月23日から伐開作業を行ない7月16日から発掘作業を始め10月17日終了した。その間、7月15日には発掘開始前の、8月21日と9月25日に遺構面の空中写真撮影を行なった。9月6日には現地説明会を実施した。また、飯ノ峯畑神社の移転に伴う調査を8月11日から29日まで実施した。終了間際になって、飯ノ峯川の改修工事により飯ノ峯畑集落の前身である江戸時代の集落跡が破壊されることが分かったため緊急に調査を実施し11月14日終了した。

第3節 調査の方法

地形的条件から土木機器の使用は不可能で、すべて人力により掘削した。運搬路・置き場が確保できないため掘削した土砂を小運搬し仮置きすることも出来なかった。そのため掘削した土砂はベルトコンベアで斜面の下部に落としたが、その際斜面の下部には土留め棚を設置し調査区外に土砂が流出しないよう対策をこうじた。

地区割りは国土座標第Ⅵ系にもとずき4m方眼で区分し第1図に示すように地区名を付けた。
(岩崎)

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境



第2図 阪南町位置図

大阪平野の南縁部は東西に連なる和泉山脈や金剛山脈に代表される山地とその北側に展開する丘陵、洪積段丘によって画されており、低地は海湾部及び中小河川周辺の狭小な面積に限られている(第3図)。

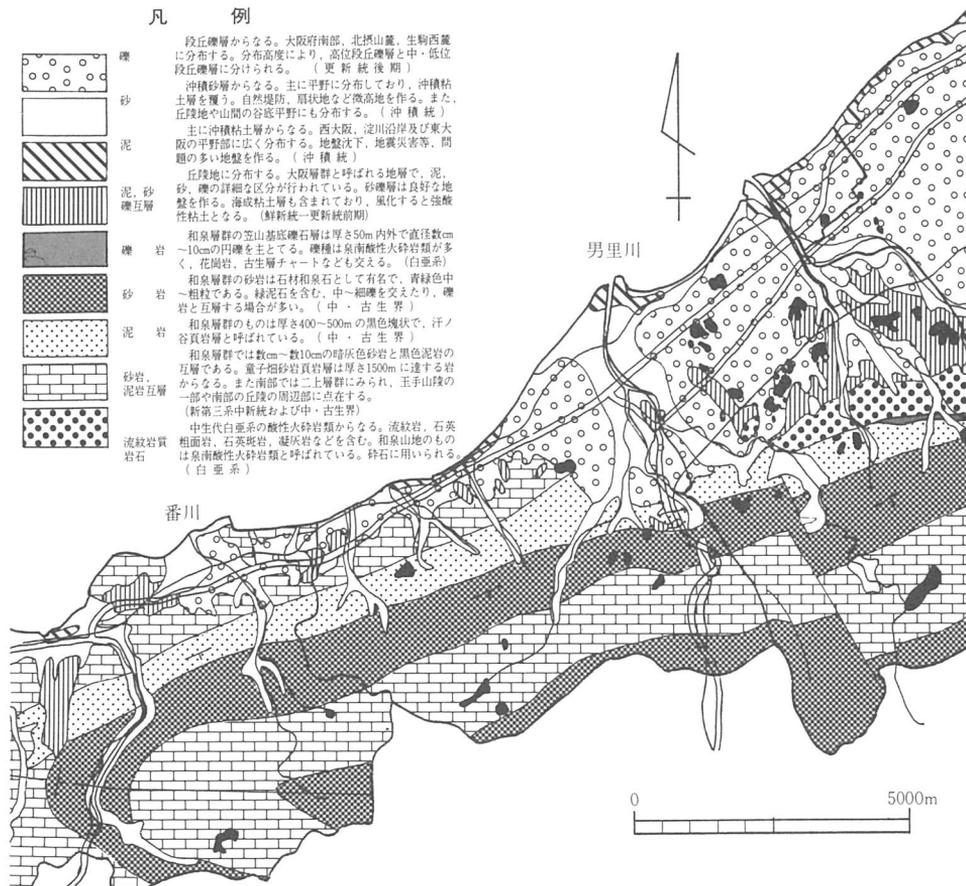
泉州地域の最南端付近に位置する泉南郡阪南町は(第2図)面積約37km²、東西・南北ともに約8kmを測る。当町は和泉山脈が大阪湾にせまる部分にあたり、大半が山地と阪南丘陵と呼ばれる丘陵部によって占められていることが特徴である。これらは紀ノ川に沿って走行する中央構造線の活動による地盤隆起に伴い形成されたものである。急激な地形の変動は次段階として深い開析谷となり

大阪湾に北流する中小河川(北から檜井川、釈迦坊川、飯ノ峯川、茶屋川)を生み、その先端部にそれらの河川によって形成された狭小な扇小地と扇状地状の段丘面がみられる。

以上のように阪南町は地形的に大別すると和泉山脈、阪南丘陵、低地に区分される。わずかな面積の低地部分は古代～現代に至るまで集落が連続と営まれており、丘陵及び台地部分は、古墳時代の墳丘、窯址にその地形が利用されており、和泉山脈は、和泉砂岩の産出地として近世の石切り場という当町の主たる産業の一つを担う役割を果たした。

調査を実施した井山城は、飯ノ峯川を河口から約1.5km遡った左岸の丘陵先端部～山地にかけて位置している。周辺は無数に展開する開析谷によって平地に延びる尾根状の地形を呈しており、中世城郭として有利な立地条件を兼ね備えている。又、井山城の北麓、飯ノ峯川両岸に位置する飯ノ峯畑遺跡は、飯ノ峯川を成因とする主谷的な開析谷の底位段丘面上にあり、中～近世の度重なる災害にあいながらも、社寺・墓地を含む1つのまとまりを持った集落を形成した。井山城とともに、主谷に沿う形で存在したであろう古道と密接な関係を持って成立していたことが推測される。

町内の古道は、摂河泉を結ぶ、或いは紀伊へ通づる重要な役割を果たしてきた。古くは菟砥川上宮、茅渟宮など宮廷との関わりも伝記伝承より考えられており、古代においては租税の運搬、中世においては熊野詣、近世においては参勤交代や石製品の搬出の通路として賑わいをみせたであろう。現在は南海電鉄、JR線によって摂河泉を結ぶ同様の役割を阪南町は果たしている。特に、昭和30年を境にして大阪東部に集中していた宅地開発の波が押し寄せ（図版3）、第二阪和国道が開道されるや否や、和泉地方は大阪市内のベッドタウンの役割を担うことになる（図版4）。古き伝統を残しつつ、玉葱、柑橘、砂糖等を中心とした農業、漁業、石材の切り出しや磨き砂の産出、繊維産業等、町内の生業は徐々に変わりつつあり、急激な造成工事により土地は改変され、分合筆の結果、周辺字名の大半は消滅した。近年、関西国際空港の建設に伴い、阪南町は新たな開発の波が押し寄せており、再び大きく変わろうとしている。（服部）



第3図 阪南町地質図

第2節 歴史的環境

阪南町内における人々の活動痕跡は、狭小な低地利用から現在の集落部分と中心が重なると思われる、実態が不明瞭であった。従来、数基の古墳と道路等の開発による調査で明らかとなった田山遺跡、神光等遺跡（二蓮池）の他は、散布地が主で、まとまった考古学的知見に恵まれていなかった。

阪南丘陵の開発に伴い実施した当協会の分布調査の結果、河川を中心とした低地部分から縄文時代～江戸時代にいたる豊富な遺物を採取、又種々の石造物の他、石切り場等確認され、新たに21箇所の遺跡が新規発見された。昭和61～62年の工事に先だつ発掘調査により、南北朝時代の山城である井山城跡、平安時代～江戸時代の寺院跡と推定される金剛寺遺跡、江戸時代の集落、生産跡である貝掛遺跡、飯ノ峯畑遺跡、ミノバ石切り場等、主として町内東南部の平安時代～江戸時代の資料が増加した。

又、昭和63年度の阪南町教育委員会の分布調査により町内の北西部分において旧石器時代～江戸時代の遺物散布が認められ、新たに14箇所の遺跡が新規発見された。

現在町内には59遺跡が周知されている（第10図）。今後さらに新遺跡の確認される可能性



第4図 泉州地方の旧石器時代遺跡分布図

弥生時代 泉州地方は堺市四ツ池遺跡、和泉市池上遺跡、岸和田市田治米宮内遺跡、泉佐野市三軒屋等に代表されるように、前期の段階で集落を営み、伴う墓域、祭祀生産形態が明らかとなり、弥生時代中～後期にいたっては各地で爆発的に遺跡の数が増大する。しかし、現在確認できる町内の遺跡は蓮池（＝神光寺遺跡）の方形周溝墓以外は石器資料である。町内では稲作という新技術に対応する肥よくな水田・耕地の絶対的不足が起因している為か、泉州地域の中でもきわだって弥生時代の遺跡が少ない地域である。又、付近の向井池遺跡、滑瀬遺跡等高地性集落も町内においては確認されていない。

古墳時代 続く古墳時代も以前集落等については空白期である。玉田山須恵器窯において須恵器窯の存在が知られているが、町内からまとまった古墳時代の土器資料は少なく、中～近世の包含層に含まれるものが主である。泉州地方は堺市黄金塚古墳、岸和田市摩湯山古墳に代表される前期古墳、により支配者階級が泉州北部寄りに形成されている。中期以降は泉州南部の岬町西陵古墳等で泉州全域に支配者層が想定しうる。又数多くの群集墳により各地域ごとに、生産力の増大と被葬者層の拡大が考えられる町内は中期の堅穴式石室



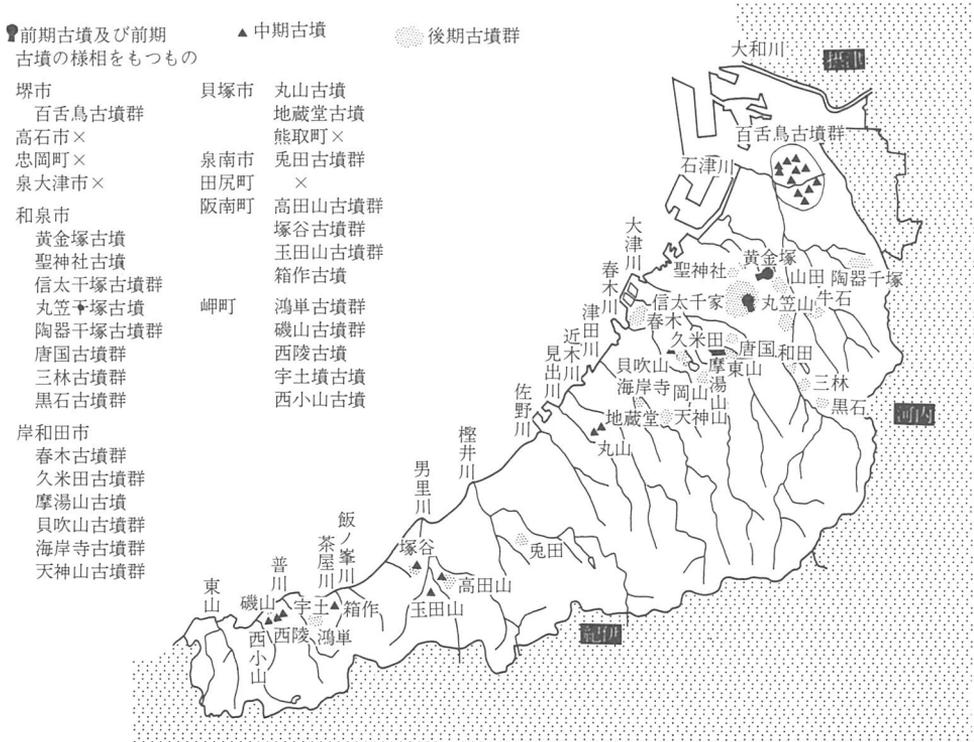
第 6 図 泉州地方の弥生時代遺跡分布図

が推定される箱作古墳、後期は、円墳数基から成る高田山古墳群、横穴式石室をもつ古墳で構成される玉田山古墳群、比較的時期の新しい塚谷古墳群等、造墓活動を通して古墳時代の一端を窺い知ることが可能である。又、堺市二本木山古墳の割竹形石棺、乳の岡古墳の長持形石棺は、和泉砂岩製の指摘があり、町内の岩脈等を再考する必要がある。

奈良時代 田山遺跡より集落に伴う遺構及び製塩関係資料が得られ背後に大集落の可能性が考えられる。この時期畿内は奈良時代以前より開始された氏族の造寺活動が活発にみられるが、町内は平安時代まで待たなければならない。

平安時代 源頼朝の下知文により「箱作荘」の名が登場し町内の文献の初見である。平安時代の資料としては長楽寺の瓦に加え、金剛寺遺跡の瓦が新資料として加えられる。阪南町では瓦焼が主たる生業の一つになる為平安～近世に及ぶ瓦の出土を見る遺跡として注目したい。隣接の泉南市海会寺、岬町の医王寺等平安時代の資料も増加している。

鎌倉～室町時代 中世における考古学的資料は、町内全域で出土する13～14世紀の瓦器碗により、開発の盛んな様相は推測されるがその動向については不明瞭である。荘園の成立～崩壊に到るまで、泉州地方が、南北朝に分属する時期をはさみ、かなり不安定な時代



第7図 泉州地方の古墳時代遺跡分布図

於和泉国井山城致合戦□□尤神妙、弥可被抽軍忠之状如件

建武五年五月十一日

武藏守判

日根野左衛門入道殿

淡輪助重軍忠状

淡輪文書「大日本史料」第六編之一二

和泉国御家人淡輪彦太郎助重申、軍忠之間事

右、自貞和三年十一月、楯籠井山城中、奉待御大将御下向、同四年

正月八日東条御発向時、馳參塚浦畢、則御共仕、其後屬守護御代、官

土田九郎手、二月六日春木合戦、致忠節、同五月十五日打入横山

宮里、焼払敵陣畢、同九月四日又押寄宮里、致散々合戦之忠節之刻、

若党又四郎被疵畢、同十月廿日池田御陣取之時、毎日致合戦畢、今

年三月十五日河内国寺田合戦、同十八日山田合戦、同十九日佐尾谷

合戦、同四月廿二日々野高岡合戦之時、進先陣、捨身命、致散々合

戦之時、分取仕畢、此条土田九郎所被見知也、然早賜御証判、為備

向後龜鏡、恐々言上、如件

貞和五年八月 日

〔異筆〕〔押紙〕〔師奉〕〔高師奉〕
〔承了〕〔花押〕

畠山国清軍勢催促状

田代文書 京都大学所蔵影写本

〔付箋〕

畠山殿御状

和泉国井山城警固事、可致忠節之状、如件、

觀応元年十二月十七日

御判

警固人中

○同文書には裏判がある。

畠山国清軍勢催促状

田代文書 京都大学所蔵影写本

和泉国井山城警固事、可被致勤厚之状、如件、

觀応元年十二月七日

〔畠山国清〕
左近将監〔花押〕

田代豊前又次郎入道殿

畠山国清軍勢催促状

淡輪文書「大日本史料」第六編之一四

和泉国井山城警固事、可被致勤厚之状、如件

觀応元年十二月七日

〔畠山国清〕
左近将監〔花押〕

〔助重〕
淡輪彦太郎殿

参考文献 (1)

田代基綱軍忠状

田代文書 京都大学所蔵影写本

川代豊前又次郎入道了賢申軍忠事、

右東条之凶徒等為御対治、御大将去貞和五年八月、自河州石河御発向之時、了賢奉御手、於御陳日夜之御用心致忠節訖、就中、去年十一月廿一日、錦小路殿石河御入部之時、了賢參最前懸御目、其後可致軍忠預御教書、日夜御用心致忠功畢、又同十二月七日、井山城可警固之由、自御大将賜御教書之間、彼至警固之刻、自同月廿一日、石河・天王寺御発向之時、了賢井山城雖令勤仕、於孫子次郎四郎利綱相副若党令進之、尼崎・柴鳴・山崎・京都御上洛令御共申畢、并丹州・摂州打出合戦致忠節之条、神保次郎左衛門尉・二宮左衛門太郎・成田九郎五郎入道、此人々見及畢、如此云致合戦忠節、云井山城警固忠勞、以兩方忠功異于他之上者、早賜御判、為備後証龜鏡、粗言上如件、

觀応二年四月一日

〔証判〕
〔承了〕(花押)

櫻雲記

(正平六年) 八月四日、泉州井山の城

南朝 淡輪彦太郎助重方 武家兵

を發して井山の城を攻め戦ふ。

足利義詮感状案

田代文書 京都大学所蔵影写本

桶籠和泉国井山城、致忠節之山、細河陸奥八郎四郎業氏所注申也、尤以神妙、弥可抽戦功之状、如件、

文和二年三月十八日

川代豊前三郎殿

〔証判〕
〔承了〕(花押)

淡輪助重軍忠状

淡輪文書『大日本史料』第六編之一五

和泉国御家人淡輪彦太郎助重申、軍忠事

一、去年七月廿五日御発向陶器城之時、致軍忠畢

一、同八月四日押寄井山城、焼払凶徒陣内畢

一、自同九月六日、迄于同十七日、被構佐野城之時、抽軍忠畢

一、同十八日被構榎井城、被籠軍勢、為人数、迄于同十二月廿五日、每日合戦、致軍忠之条、仲村三河九郎令存知畢

一、同十月六日押寄井山城、致合戦忠畢

一、後二月廿日京都御合戦之時、抽忠節畢

一、同三月廿七日於荒坂山、致軍忠畢

一、同五月六日於泉州松村、抽忠節畢

一、同十六日於加守郷、致軍忠畢

右、致度々軍忠之上者、賜御証判、為備龜鏡、言上如件

正平七季六月一日

〔異筆〕
〔加一見候畢〕(楠木正儀)

去文和二年泉州井山城中、以来去年二月八日同十五日京都合戦抽

軍忠之条尤以神妙、可注申公方之状如件

文和五年三月廿一日

日根野二郎殿

源判

細川清氏感状

田代文書 京都大学所蔵影写本

去文和二年、泉州井山城中以来、至去年、京都合戦軍忠相統之条、尤以神妙、可注申公方之状、如件、

文和五年三月廿一日

田代豊前三郎殿

〔証判〕
〔承了〕(花押)

参考文献 (2)

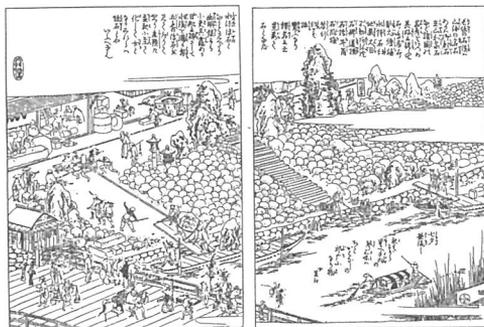
であったことは言うまでもない。井山城もその1例である。又、町内の数ヶ所の共同墓地の石仏、一石五輪塔等宗教関係石造物の数は夥しくなる。仏教の広まりと共に戦乱生活の不安定さが直結し、生業の一つとして、石切りに関与し始めたと考えられる。

安土、桃山時代 信長・秀吉の根来攻めにより、泉州地方の城郭は元和の一国一城令を待たずしてその多くが大破する。政策面での統一もみられ徐々に近代化へむけて整理されつつある。この時期の知行により、箱作、具掛、舞の三村が一つのまとまりをもつようになる。

江戸時代 阪南町内は、近世に入り度重る知行の変化がみられるが、箱作村、具掛舞村、山中新田は元下ノ荘としてまとまりをもっていた。寛文年間、青山因幡守の領地となり、享保年間、土屋相模守政直領地となっても、まとまりをもっていた。石高は年々増し、開業として石切り、瓦焼き、漁業、砂糖作り、綿栽培等、種々の生業に従事していた。中世から続く溜池の開発も江戸時代になってからさらに活発となり、絵図にも数々記されている。



第8図 和泉名所図絵



第9図 摂津名所図絵

農地開発も盛んであったが、低地面積の少い阪南町は、農業以外にも石切りによる生業の比重が大きく、嘉永4年には数十人に及ぶ石切り職人が、大阪市内、伊勢、岡山その他、各地方へ出稼ぎに出た人々の宗門改めの文書も残っており、製品のみならず、工人自身又技術が伝播した時期でもある。これは和泉砂岩の切り出しによる町内の争議文書とも深く関わっており、石切り生業の拡大化が阪南町内において不可能であったための流失とも考えられる。和泉砂岩石切りは、当初井関川周辺が中心であり、飯ノ峯川に比べ大型の製品化しやすい岩脈であったが、江戸時代中期後半より、石仏、石臼等小型の生産化が進み、活発な活動を展開していった。『和泉名所図絵』『摂津名所図絵』にもその様相が記されている。

(服部)

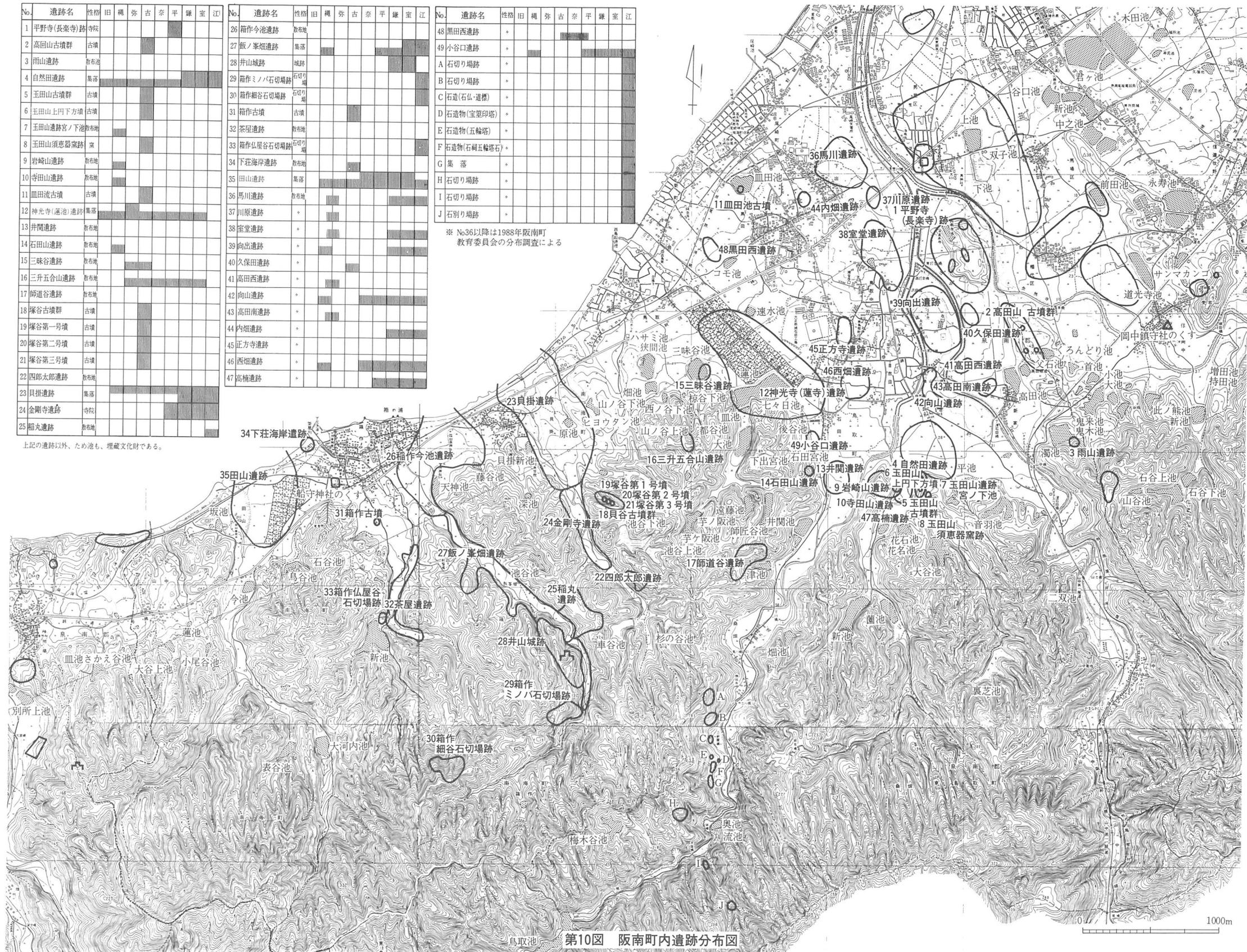
No.	遺跡名	性格	旧	縄	弥	古	奈	平	鎌	室	江
1	平野寺(長楽寺)跡	寺院									
2	高回山古墳群	古墳									
3	雨山遺跡	敷布地									
4	自然田遺跡	集落									
5	玉田山古墳群	古墳									
6	玉田山上田下方墳	古墳									
7	玉田山遺跡宮ノ下池	敷布地									
8	玉田山須恵器窯跡	窯									
9	岩崎山遺跡	敷布地									
10	寺田山遺跡	敷布地									
11	皿田流古墳	古墳									
12	神光寺(蓮寺)遺跡	敷布地									
13	井関遺跡	敷布地									
14	石田山遺跡	敷布地									
15	三味谷遺跡	敷布地									
16	三升五合山遺跡	敷布地									
17	師道谷遺跡	敷布地									
18	塚谷古墳群	古墳									
19	塚谷第一号墳	古墳									
20	塚谷第二号墳	古墳									
21	塚谷第三号墳	古墳									
22	四郎太郎遺跡	敷布地									
23	貝掛遺跡	集落									
24	金剛寺遺跡	寺院									
25	稲丸遺跡	敷布地									

No.	遺跡名	性格	旧	縄	弥	古	奈	平	鎌	室	江
26	箱作今池遺跡	敷布地									
27	飯ノ峯畑遺跡	集落									
28	井山城跡	城跡									
29	箱作ミノハ石切場跡	石切り場									
30	箱作細谷石切場跡	石切り場									
31	箱作古墳	古墳									
32	茶屋遺跡	敷布地									
33	箱作仏屋谷石切場跡	石切り場									
34	下莊海岸遺跡	敷布地									
35	田山遺跡	集落									
36	馬川遺跡	敷布地									
37	川原遺跡	*									
38	室堂遺跡	*									
39	向出遺跡	*									
40	久保田遺跡	*									
41	高田西遺跡	*									
42	向山遺跡	*									
43	高田南遺跡	*									
44	内畑遺跡	*									
45	正方寺遺跡	*									
46	西畑遺跡	*									
47	高楠遺跡	*									

No.	遺跡名	性格	旧	縄	弥	古	奈	平	鎌	室	江
48	黒田西遺跡	*									
49	小谷口遺跡	*									
A	石切り場跡	*									
B	石切り場跡	*									
C	石造(石仏・道標)	*									
D	石造物(宝篋印塔)	*									
E	石造物(五輪塔)	*									
F	石造物(石祠五輪塔石)	*									
G	集落	*									
H	石切り場跡	*									
I	石切り場跡	*									
J	石切り場跡	*									

※ No.36以降は1988年阪南町教育委員会の分布調査による

上記の遺跡以外、ため池も、埋蔵文化財である。



第10図 阪南町内遺跡分布図

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

A. 調査成果の概略

調査経過の項にも記したように、今回の調査の対象は大きくは3ヶ所に分けることができる。ひとつは、丘陵稜線部の試掘調査の成果を受けて実施した中世山城である井山城跡の発掘調査であり、これに関連して実施した丘陵東裾の飯ノ峯川に面した平坦地部分の試掘調査である。またひとつは、丘陵東斜面と裾部に鎮座する飯ノ峯神社と石祠の記録調査および地下遺構確認のための発掘調査であり、そして、新たに確認した近世の集落遺構の調査である。

井山城跡の試掘調査および発掘調査では、検出した生活遺物は少量であったが、丘陵頂部や斜面に曲輪状遺構・堀切・礎石建物跡・焼土塊・ピットなどの遺構を確認し、中世山城の様相を考古学的に把握することができた。また、現在に残る史料との対比により、南北朝動乱期の情勢をより鮮明に知ることが可能になった。

飯ノ峯神社と石祠は、近世から現在に至る飯ノ峯畑（畑村）集落の信仰の対象であり、農神としての性格を有している。また、今もなお旧来の宮座の伝統が残ることでも知られている。調査は構造物の記録のほか、貴重な民俗資料となる移転に伴う遷座祭の記録を行なうことができた。また、発掘調査では、現在地での同形態の信仰が少なくとも江戸時代中期にまでさかのぼることを明らかにすることができた。さらに、信仰の対象であったと考えられる土製神像も検出することができた。

近世集落遺構は、ミノバ石切場遺跡に向かう飯ノ峯川上流の両岸に今回新たに確認したもので、山林の中に当時の姿を残して点在していた。確認した遺構には、屋敷の基礎となる石積みや井戸、道などの生活遺構のほか、寺跡と考えられるものもある。また、周辺には多量の陶磁器類や瓦が散布している。さらに、石臼や手水鉢などの石製品やコッパなどが多数散布し、石製品の加工場と考えられる平坦地、そして炭焼窯なども確認している。近世の集落がこのような良好な状態で保存されていることは極めて稀なことであり、前述の信仰の対象と合わせ、江戸時代の地方農村の具体的姿相を探る貴重な資料となった。

以上のように、今回の調査では中世以降阪南丘陵地域で展開された歴史を多方面から考古学的に検証し、多くの成果をあげることができた。 (宮野)